

真の「勇気」*とは何か

— 品性・品格教育についての講演の記録 —

青木 多寿子・Bernice Lerner**・川合 宗之・田崎 慎治
(2009年11月30日受理)

The Meaning of Courage in and Beyond School

Tazuko AOKI, Bernice LERNER, Muneyuki KAWAI and Shinji TAZAKI

Abstract. Courage is a cardinal virtue, one on which other virtues hinge. Through the teachings of Aristotle, we learn why courage looks different in each individual and is situation dependent. Courage is needed when one feels fear. It is normal to feel fear when confronted by dangerous, difficult, or painful situations. If an individual is overcome by fear, he/she is a coward. And if someone acts as if he/she has no fear he/she is rash. Extreme reactions (i.e., the excessive display of fear or the opposite-being a "pretender" to courage) are indicative of vice. To act courageously (i.e., to fear the right things, at the right time, and in the right way) is to display virtue. How is the virtue of courage acquired? Through practice. One becomes brave by doing brave acts. Reading about or observing exemplars (in real life or in film) can deepen our understanding of the potential within each of us to display moral courage.

1. はじめに

本稿は、2009年1月9日に広島大学現代GP「子どもの心と学び支援プログラムの展開」心と学び支援セミナー主催で、講演シリーズ第9回として行われた講演会の内容を収録したものである。

講演者は、バーニス・ラーナー教授（ボストン大学人格倫理向上センター上級研究員，元所長）であり、講演のタイトルは「真の勇気とは何か」であった。この講演は、「品性・品格の育み方」という主題で行われた2つの講演の内の1つである。もうひとつはカレン・ポーリン先生（ボストン大学人格倫理向上センター上級研究員，元所長，現在モントローズ・スクール校長）の「学校と家庭で品性・品格を育むには」であった。講演は、司会者の青木が冒頭で品性・品格教育の概要を説明し、その後、ポーリン先生のお話が行われ、その次に行った講演である。

当日は青木が司会、川合が通訳を務め、田崎が広大の附属教育実践センター職員と一緒に会場設営を行った。また、当日配布した資料は、日本語訳を含め、青木と田崎で準備した。

2. 講演

(1)講演者の紹介

講演に先立って、主催者を代表して青木多寿子先生（広島大学）より講演者の紹介があった。

青木：アメリカの教育がよくなったと言われます。レーガン大統領の頃に始まったアメリカの教育改革。その改革の1つにCharacter Educationがあります。これは、日本では人格教育、品性・品格教育など、様々に訳されています。人の性格には、生まれつきの部分と生後の習慣によって形成される部分があります。品性・品格教育は、生後の習慣によって形成される部分を重視して、子ども達がよい行動を取れるように、よい習慣を身につけることができるように、核となる徳をいくつか定めて、その核となる徳を中心に、学校全体、時には学区全体で取り組んでいく包括的な教育方法です。この、よい行動の習慣を形成してゆこうとする方法は、生徒指導、道徳教育、教育方法、学級経営、保護者や地域との連携にも関わるものです。そして、ボストン大学の人格倫理向上センターは、この品性・品格教育をリードする役割を

**ボストン大学。本稿のスライドは、Lerner教授の許可を得て掲載したものである。

担ってきました。今回はそこでご活躍のお二人の先生においで頂きました。最初にお話しいただくポーリン先生は、ブッシュ大統領が就任なさった際、ホワイトハウスから呼び出しを受けて、大統領や高官の前で品性・品格教育について講義をなさったそうです。次にお話しいただくラーナー先生は、数ヶ月前までセンターで所長をしておられた先生で、全米だけでなく、世界の各国で教員セミナーや講演をしておられます。

(2)ラーナー先生の講演

私は徳の一つについてお話しします。それは「勇気」についてです。勇気を徳と考えることについて、皆さんは、子どもたちに勇気というものをお教えることは大切だということに同意してくださいますか。

今日は勇気について二つお話しします。一つ目は、勇気とは何かということです。これについて深く考察していきたいと思えます。二つ目は、勇気というものを深く考察したあとに、どういうふう子どもたちに教えていったらいいのかということについてです。

まず、勇気というものについて定義させてください（スライド1）。勇気の語源は古いフランス語では、Corage, Curage-heart, Spirit, ラテンでは、Cor-heart, 精神などのことばに由来します。私はまず、皆さん自身が勇気というものをどのようにお考えか、皆さん自身の勇気の定義に興味があります。今から1分間で、ご自身が思っている勇気とは何かについて考えて、紙にちょっと書いていただけますか。では、どうぞお願いします。

どなたか、ご自身の勇気の定義についてご発表いただけますか。

Courage 勇気

心臓 精神

Ofr. Corage, curage - heart, spirit

L. Cor - heart

〈スライド1〉

聴衆（男性）：勇気を出して発表します。三つ思いました。困難から逃げないということ、失敗を恐れないということ、それから正しいと信じて行うという三つです。

ラーナー：英語の辞書では、何か危険だとか困難だとか、あるいは痛みを伴うものから逃げずにそれに直面することを勇気と定義付けしています。先のポーリン先生のお話の時、ある先生が、ご自身の怪我のことをおっしゃっていました。皆さんにも、危険だったこととか、困難だったこととか、痛みを伴うこと、そういう経験をおもちではないでしょうか。今からちょっとした時間をさしあげますので、書いていただけますか。

Courage

- The attitude or response of facing and dealing with anything recognized as dangerous, difficult, or painful instead of withdrawing from it
- Quality of being fearless or brave; valor
- Mind; purpose; disposition; spirit; temper

- Webster's New World Dictionary of the American Language, 1966.

危険な 困難 痛みを伴う

〈スライド2〉

誰もがそういった、怖いとか、危険だとか、困難だとか、痛みを伴うような経験があると思うんです（スライド2）。それは子どもにとってもそうだと思います。危険なこととか、困難なこととか、痛みの伴うことに直面したときに、どんな感情を抱きますか。そういう困難にぶつかったときに、どういった気持ちになりますか。皆さんにお尋ねします。そのときの感情や気持ちはどうですか。このスライド（スライド3）の少女と同じ気持ちではありませんか。

この少女は恐れやフラストレーションといった感情を持っていますね。これを覚えておいてください。恐怖を感じることは、それは誰しも同じかという、人によって恐怖の程度が異なります。この中で、飛行機に乗ることに恐怖を感じる人は何人いますか。何人かおられますね。ありがとうございます。この中に、犬を見て怖いと思う人は何人いらっしゃいますか。虫を見て怖いと思う人は、この中に何人いらっしゃいますか。この中

What is the emotion we feel when faced with a dangerous, difficult, or painful situation?



〈スライド3〉

で、今から大切なテストを受けなければいけないという時になったら、怖いと思う人は何人いらっしゃるでしょうか。この中で、自分の上司に話をしに行かないといけないということになったら、怖いと感じる人は何人いらっしゃるでしょうか。この中で、何か友達にとって不都合なことを伝えないといけないと思ったときに、ある種の恐怖を抱く人は、何人ぐらいいらっしゃるでしょうか。友達は絶対にそのことを知らないといけないんだけど、友達はそれを聞いたら嫌がるだろうな。でも、言わなければ、という状況です。この中で、お医者さんにかかるとか、歯医者さんにかかるとか、そういったことに恐怖を感じる人は何人いらっしゃるでしょうか。ありがとうございます。

今から短いビデオをお見せします。ある人にとっては、それはすごく恐怖なことだけれども、ほかの人にとっては、それが全く恐怖でない状況のビデオです。

〈一人の少女が何の防御もせずに木の幹の中のハチの巣に近よる。上半身に多くのハチが止まる。そしてさらに、おびただしい数のハチが飛び交う巣箱の近くに向かって、近寄り、ハチの飛び交う巣の中に手を入れる少女の姿が映っている〉

今のビデオを見ておわかりかと思えますけど、人によって怖いものは違います。このスライドを見てください（スライド4）。昨年訪問した小学校のひとつです。この子ども達も、私たちが訪問したとき、全く気にせず集中している子もいれば、カメラに向かって積極的にこちらを向いてピースしている子もいれば、下を向いて書道をしている子もいる。何となくこっちをちょっと見たり、照



〈スライド4〉

れているような子もいたり、さまざまです。

恐怖というものにも多様な側面があります。「深さ」と「程度」があり、恐怖はこの2種類で違ってきます。私は病院に行くとき、ちょっと診察してもらう程度だったらそんなに怖くないですが、今から手術をしたらかなり怖いんです。恐怖には程度が影響します。

今から恐怖という感情が、私たちに打ち勝つ状況というのは、どういう状況なのか、いくつか例を出します。私たちが本来、恐怖とを感じるべきではない「ものに対して」恐怖を感じる時。それから、我々が本来そう感じるべきでない「ように」恐怖を感じる、そして感じるべきでない「とき」に恐怖を感じる時です（スライド5）。

The emotion of fear overcomes us when we...

- **fear what we should not.**
- **fear as we should not.**
- **fear when we should not.**

〈スライド5〉

アリストテレスが次のように言っています（スライド6）。人とは、正しい動機、正しい方法から生じた、本来みんなが怖いと感じるべきことに対して恐怖を感じる人。そういう人たちは、恐怖を感じるような状況でも、ある程度その状況に対処する自信を持っている。それが勇気（Brave）であると。

“The [person]... who faces and who fears the right things, from the right motive, in the right way, and who feels confidence under the corresponding conditions, is brave...”

-Aristotle

〈スライド6〉

それから、勇気があまりにもなさ過ぎると、逆に恐怖が勝ってしまう(図1)。これは美徳の逆の悪徳につながってしまうことがあります。反対に、実は勇気がないのに、いかにも私は勇気がありますと見せかけたり、本当に勇気があるんだよと見せかける。そういう状況も、やはり美徳ではなく悪徳につながります。ですから、困難な状況や、痛みを伴う状況でも、勇気を目指し、目的にして行動することが大事です。



図1 恐怖の大小と悪徳・美徳の関係(板書)

恐れが勝ってしまうと、小さな勇気を大きな恐怖が押しつぶして悪徳の方へ向く。逆の場合もあり、これは腰抜けとか、臆病と言われる状況になります。例えば戦地で、第一線で、本当は勇気がないのに、「おれは勇気があるぞ」と見せつけようとして、戦地の最前線へ走っていく。そういうふうに見せたい気持ちがあると、Rush, つまり、急いでいるとか、思慮が浅いという感じになります。

今から、腰抜けや臆病について考えてみましょう。このスライドの絵は、「オズの魔法使い」にでてくる臆病な、腰抜けライオンの図です(スライド7)。自分に自信がない。困難や痛みを伴う状況になると、非常に多くの恐怖を示します。と

The Coward 腰抜け

- Lacks confidence
- Displays excessive fear in difficult/painful situations



〈スライド7〉

ここで皆さん、自分自身が危険だとか困難だとか痛みを伴う状況について書いてくださいと先ほどお願いしましたが、書いてくださいましたか。そういう状況で、臆病者はどのような行動をするのでしょうか。

例えば先の講演で体験を話して下さった先生がおっしゃったように、子どものときに怪我をして2カ月学校に行けなかった、そういう状況について考えてみたいと思います。2カ月学校に行かない間に、学校の先生はたくさんのお子に他の子どもには教えていたわけですから、2カ月休んでその後学校に行くことは、非常に勇気があることだったのではないのでしょうか。このとき、臆病者ならベッドから起き上がることも拒否してしまいます。それから、昼も夜も関係なく泣きわめきます。または、1年くらい学校に行かないまま、家に閉じこもってしまうかもしれません。臆病者の気持ちはどういったものか、各人で考えることができるかと思ひます。

今から、臆病を示すビデオをお見せします。『High Noon (邦題『真昼の決闘』)』というタイトルの西部劇のビデオです。主人公は保安官です。犯人たちがこぞって列車に乗って、ちょうど12時に町にやってきます。その保安官は、誰が犯人たちと闘ってくれるか、友達の家を訪ね歩きます。友達は「犯罪者なんて危ないよ。何で私たちが闘わなきゃいけないんだ。あんた、ちょっとおかしいんじゃないか?」と言います。それから、ある仲のいい友達の家に行って頼みます。「困っているんだ。12時に、一緒に駅に行って闘ってくれないか」と。何が起こるか、見てみてください。

〈ビデオ上映〉

何が起こったか、見ていただいたと思います。この友だちは奥さんの影に隠れて、奥さんに「いない」と言ってもらう。保安官に対して、自分は聞えない、とは言わない。この旦那さんは臆病だと思いませんか。

先ほど、腰抜けの人、臆病な人の対極にあるのが、Rush, 軽率な人だとお話ししました。次は映画『Rush Hour』を見てください。本来は恐怖心があるのかもしれないんだけど、正しくない恐怖心のなさを持っていると、こんなの平気だよということを示そうとします。飲み過ぎの人たちとか、気分が大きくなっているような状況で、通常では考えられないような馬鹿げたことをやらす、そんなこともあり得る状況です。

先ほどの例ですが、2カ月学校に行けなかったということでした。もし、軽率な、あまり思慮深くない行動をする人なら、その場合、どんな行動をとるのでしょうか。おそらく、1日で学校に復活して、怒りながら椅子を蹴飛ばすとか、叩くとか、そんなことをしますか。皆さんは軽率な行動をとることがいろいろ想像できると思います。皆さん、先ほど、危険を伴うとか、困難であるとか、痛みを伴う行動を書いていただきました。それぞれについて、軽率な行動にはこんなことがあり得るな、と想像してみてください。

今から、軽率で思慮の浅い人のビデオを見せます。メル・ギブソンの映画です。今から飛び降り自殺をするぞという人のところへ、警察官の彼が助けに行きます。高層ビルの屋上で「飛び降りるぞ」と言う人がいて、メル・ギブソンが行きます。「ちょっと話そうや」ということになって、煙草をくわえさせます。心の中では多分、早く捕まえてやると思っていたんだと思います。それで、ちょっと相手が油断した隙に手錠をはめました。相手が、「こんなことをするんだったら飛び降りるぞ」と言っていましたね。警察官の彼が「飛び降りるんだったら、おまえは2人殺したことになるぞ」と言っていました。結局、下にレスキュー隊が来て待っており、二人で飛び降りました。

勇気というのは、図1の中で、腰抜け、思慮の浅い、この両極端にならない程度で直線上に存在するものです。ちょうど真ん中にあるとは限りません。ちょっと右寄りかもしれないし、逆寄りかもしれません。ただ、今から Courage (勇気)

というものを考えるときに、二つ自分自身に問うてみてください。一つは、誰かモデルとなる人、それは知っている人でもいいですし、目標とする人でもいいんです。そういった人を思い浮かべてみて、もし自分と同じような困難、痛みを伴う危険な状況に陥ったら、その人ならどうするかを思い浮かべてみる。そして二つ目は、自分自身の傾向です。困難にぶち当たったときに、自分自身は図の中のどちらに向くかなと、自分自身を観察してください。



Guo You Bu Ji

“The excess is as bad as the deficiency”

(スライド8)

ですから、「～しすぎる」というのは、何も無いという状況と同じぐらい、よくないこととなります (スライド8)。

これを勇気に置き換えると、思慮が浅いということ、逆に何もしない腰抜けというのは、必ずしもいいことではない、ということです。何が大切か、何が正しいかはわかっている、それを行動に移さないのは、やっぱり「腰抜け」か「臆病」ということとなります (スライド9)。

“To see what is right and not do it, that is cowardice.”



- Confucius

(スライド9)

勇気のある人というのは、何か事が起こる前は

冷静に客観的に判断する。ところが何か起こったときにはきちんと行動がとれる、つまりある程度の気持ちを奮い立たせながら行動ができる人です。加えて自分自身の中に基準がある。自分自身を肯定的にとらえて、自分自身を褒める。そういう自分自身の基準の中で行動しようと思う動機があります。勇気のある人は恐怖がないのかというと、そうではない。誰も必ず恐怖はあります。ただ、勇気のある人は正しい適切な在り方、恐怖にどう対処したらいいかを、きちんと、あるべき姿で対処できるのです（スライド10）。

The Brave Person

- **Is collected beforehand, and excited in the moment of action.**
- **Is motivated by a sense of honour.**
- **Will have fears, but will face them as he or she ought.**

（スライド10）

たとえば爆発物をリュックサックかかばんに入れて、人込みの中、ショッピングモールや人混みの多い所に入って、それを爆発させて多くの人々の命を奪う。これは、果たして勇気があることでしょうか。そういった行動をするのは、勇気があることかもしれませんが、この場合は勇気があるといっても、それは悪徳の悪い勇気です。決してよい勇気ではない。やっぱり勇気は美徳に基づくものでなければなりません。勇気とは、ほかの美徳の前提条件となります（スライド11）。

Courage is...

- **the precondition of all other virtues**
- **will at its most determined, and, in the face of danger or suffering, at its most necessary.**
- **resistant to intellectualism**

- André Comte-Sponville

（スライド11）

Courage Look-Alikes vs. True Courage

- **The courage of the citizen-soldier who is not motivated by penalties or prizes, but by an internal sense of what is right.**



（スライド12）

勇気ある人とは、いろいろな危険や困難にぶつかっても、それに断固として受け止める気持ちや基準、そういったものがあります。これは知性の偏重と反対のものではありません。しかし知性を偏重しなくても、やはり勇気はあると思います。

映画『フォレスト・ガンプ』をご存じの方は多いと思います。この主人公は学習する能力がちょっと不足気味ですが、非常に勇気のある人です。勇気にも、お話したように本当の勇気、真実の勇気と、見せ掛けの勇気があります。兵士の中には、「これが正しい」という自分自身の正義が動機になって行動している人もいますが、メダルがもらえるとか、賞がもらえるとか、そういう思いで行動していることがあります。品格教育を実践している学校も同じです。いい答えを出したり、道徳的な行動ができるとシールを張ったり、ご褒美を与えたり、そのような方法で取り組むことが多いのですが、それが自分の正義に基づく行動であれば正しく機能しますが、シールをもらうことを目的に行動をするというのでは、表面的にはいかにも勇気がある行動とか品格のある行動をしていても、それは本来目指すべき方向ではありません（スライド12）。

我々の中で最も恐ろしいものの一つに、死というものがあります。死に直面している人たち。これから病気がよくなるのではなくて、死んでしまう可能性のほうが高い人たち。きっと死んでしまうだろうということを知りながら、最期のときを迎える。これも、本当の勇気が必要なことだと思います。その死ぬ可能性の方がもし高い場合、その可能性が高いということは、自分の希望すること、つまり、治りたい、生きたいなど、自分がこうありたいとか、こうあって欲しいとか、この方

がいいという思いと現実とは逆をいく可能性が高いこととなります。このような場合にその事実を直面できることが、本当の勇気です。

• **The courage of the passionate person.**



〈スライド13〉

情熱そのものは、必ずしも勇気とは結び付きません。例えば、ホテルの中で物をなくしてしまってそれを必死で探す。それは一種の情熱ですが、それが勇気に結び付くかと思ったら、ちょっと疑問だったりしますよね。しかし情熱を人に与えることは勇気と関わっています。情熱を自分で意識して、それをどういうふうを選択して使っていくか。どういうふうの人に伝えて影響を与えるか。そういう観点まで及んでくると勇気につながる情熱になると思います（スライド13）。

勇気のある人になるには、どうしたらいいのか。次もアリストテレスの言葉です（スライド14）。ここで彼は、最初は、美德を得るためには、自分自身で経験を積んだり、ある程度練習することが必要だと言っています。そしてそれを繰り返して、勇気のある行動を取っていくうちに、本当に勇気のある人になるんだ、と言っています。

皆さんの資料の中にエッセイを載せています。

How does one become courageous?

“... the virtues we get by first exercising them...we become brave by doing brave acts.”

- Aristotle

練習

〈スライド14〉

最初の「勇気」というエッセイ（資料1）は、ベトナム戦争に出た兵士の小学校時代の話です。彼が小学生、9歳か10歳のころの経験で、そのときに勇気を振り絞ってこういう行動をしていたらよかったと、ベトナム戦争に出たときに思い起こしています。あのときにこういう行動をしておけば、今また、ベトナム戦争の状況も、もうちょっと勇気のある行動で変えられたかもしれない、というようなことを述べています。

先ほど意見を聞かせてくださった先生が仰っていたように、子どもに対して、勇気のある行動を教えるもう一つの有効な方法は、実際に勇気のある人々の例を子どもに提示することです。それは例えば歴史上の人物でもいいですし、自分の身の回りの勇気のある人々でもいいのです。子どもが、この人の勇気をまねて欲しいな、と思う人があれば、その勇気ある人々の例をモデルとして示してゆくことです。また、子どもたちが自分自身の友達の中から、「この友達は勇気がある」と思われる子がいたら、子ども達はその勇気ある友達の行動をまねて、勇気を練習して学んでいくこともあるかと思います。

もう一つ、資料2に癌で苦しんでいるお子さんのエッセイを載せました。これは非常に感動的な文章です。他の研究会に出たときに、他の方が発表していたものをいただいてきました。死に直面している、勇気ある子どもが書いた文章です。

それからもう一つ、別の学習の方法としては、自分自身がどうだったか、自分自身の行動を振り返って、それが勇気のあることだったかどうかを振り返ってみる方法があります。もし勇気のない行動だったなら、次回、同じような状況に遭ったときにどういう行動をすればいいかを自分で考える。これも一つの学習方法だと思います。

ボブ君というお子さんの書いた詩も、一緒に資料に加えています（資料3）。これは、ボブ君が女の子をパーティーに招待したときのことなのですが、勇気のある行動を取れなかったことへの後悔を詩にしています。

それからもう一つ、勇気を身に付ける方法として、友達や周りの人たちと勇気について議論したり、語り合うような機会を設けて、勇気について深く考えるという場を作ることも考えられますね。

時間になりましたので、ここまでと致します。

(3) 質疑応答

聴衆（男性）：勇気とか正直さとかを子どもたちに教えていくときの、教師の役割ですね。説明して教えるのか。学校のスタッフにどんな役割があるのででしょうか。

ラーナー：どちらかというところロールプレイングのような感じで、例えば自分が恐れてしまう状況であるとか、本当は怖いんだけど怖くないよというふりをしたくなる状況、そういう状況の中で自分自身がどうしたらいいとか、そういうことについて考える機会を設けてみてはいかがでしょうか。そういうロールプレイング的なことを取り入れることができますか。

もっと具体的に言うなら、こういうところは苦手だよ、こういうところは怖いよね、という状況をいろいろ考えてみる。例えば、転校してきて新しいクラスに入るとかは、一種の恐怖だと思います。あるいは、昼食は日本は教室で食べますが、アメリカではランチルームで食べます。そんな中で友達ができずにそこで1人で食べているとか、そういう状況はやっぱり一種の恐怖だと思うんです。そういう状況を見たときに、指導者、教師としては、例えばランチを1人で食べている状況であれば、一緒に座ってあげるとか、転校生がいたら「何々君、一緒に座ってあげて」とか、そういう声かけをする、つまり、先生方がまず勇気のある行動をちょっと見せたり、提示する。そうすることによって、クラスの中に「こういう行動をすれば、それが正しいんだ」という雰囲気、クラスというコミュニティの中に、勇気ある行動の輪が広がっていく。そういうふうに先生方からも実践を始めて、正しい例示をしてあげるのも一つのやり方です。

別の例を出すなら、子どもの中には算数が苦手だとか、国語が苦手だとか、しゃべることが苦手だとか、そういういろいろな、苦手なこととか怖いことがあると思うんです。そういうことがあると、一斉授業的な部分に小さなステップをその子どもに積んであげて、恐怖を感じないようにしてゆくことができます。教師が気をつけて小さなステップをつくり、ステップごとに指導してゆく。書くことが苦手なら、「最初の部分はちょっと先生と一緒に書いてみよう」と声をかけて書いてみて、残りを「書いてごらん」という感じで書いて

もらう。いろいろなやり方で、ちょっとずつ恐怖を減らしてあげ、勇気を持たせる支援をしてゆけることができるかと思います。

先に講演をなさったボーリン先生が書かれた『Building Character in Schools』という本には学校で実践でき、品格教育に結び付くような実践例が多く載っていますので、それを参照してください。

(4) 謝辞

最後に、司会者の青木から次のあいさつがあった。

今日は新年早々の学期が始まったばかりの中、また足下の悪い中、お越し頂きましてありがとうございます。今後も、本日お話しいただいた先生方と連絡を取りながら、品性・品格教育の研究を進め、日本でも実践を少しずつ広めてゆきたいと願っております。興味がおありの先生がおられましたら、私たちに連絡を取ってください。力を合わせてやって行けたらと思っております。今日はどうもありがとうございました。

〈引用文献〉

Ryan, K. & Bohlin, K. E. 1999 “Building Character in Schools; practical ways to bring moral instruction to life.” Jossey-Bass A Wiley Imprint

本講演を実施するにあたり、科学研究費（平成19年～21年、萌芽研究；課題番号 19653109；代表、青木多寿子）を使用した。

〈注〉

* ギリシャ哲学には、4種の主要な徳（Courage, self-mastery, Justice, Wisdom）があり、「勇気」はその中の一つである。

【資料1】

勇気についての一つの練習

この数週間、リンダは赤い帽子を毎日学校にかぶっていった。リンダは、授業の時でも決して帽子を脱ごうとはしなかった。でも、それは学校で禁止されていたので、リンダはそれなりの嫌がらせを受けた。そのほとんどがニックという男の子からだった。ニックはリンダの後ろにこっそり忍び寄り、グイッと引っ張ってひったくった。それは数週間続いた。女の子達がクスクス笑い、男の子達はニックをそそのかしてリンダをからかわせた。自然と私は何かをしたくなった。しかしそれは不可能だった。私はリンダをかばうことで自分まで不利になりたくなかった。私にはプライドがあった。ニックにも問題があった。それで私は、「自分にできることは何もしないこと」と考え、私はリンダを助けるのをやめた。私はリンダが手で帽子を取られまいと必死で押さえながら、何もなかったかのようにニックに微笑んでいるのをただ見ていた。

私にとっては、それは何もないことではなかったけれど、私は依然として自分のやり方を通した。私は何かをすべきだった。なぜなら、4年生というのは見境がないのだから、時間が経過しても事態はよくなる上に、12年後にベトナム戦争が悲惨な結果をもたらしたとき、勇敢に振る舞う練習を学校でやっていれば、この戦争に関しても、少しは役に立ったかもしれないと考えた。

“The Things They Carried” (Tim O'Brien) より

【資料2】

私は息ができる、一日は一瞬の積み重ね

癌です。こういわれたらどうしますか。あなたは癌です。そう言われたとき、私は2歳でした。何も理解できませんでした。誰も皆、癌の人は私のように毎日病院に行き、検査を受けて、注射をされて、チューブを付けて、放射線治療を受けるのでしょうか。私は自分の命がどれほどはかないか、など微塵も考えませんでした。私が幼なすぎて単純だったのは幸いでした。おかげで私は落ち込まずに済みました。でも、私が何も覚えられないことで頭を悩ませました。ほんのわずかの断片的な記憶と両親の話が当時を思い出すわずかなヒントです。私は毎日、精神的に、時には体力的に戦っています。そして私は一日は一瞬の積み重ねであることを学びました。私にできること。それは、一瞬に一瞬を積み重ねて1日にすることです。

自分の人生を癌と共に生きて、人生は試練の連続であることを学びました。私は人生そのものに計り知れない感謝の念を抱いています。ただ生きていくだけで、です。今の11年間の小康状態は、とても幸運なことであり、第二のチャンスを楽しめることをとても喜んでいます。自分の経験を通して、私は自分自身よりもっと大きなものを信じることを学びました。私は困難なときには希望と信念を持つことを学びました。小さなことに気づくため、そして本当に純粹ですばらしいことに気づくためにはスピードを落とすことが必要です。癌のような煩わしいことにも、他では得られない気づきがあるのです。

ある日、医者が家に電話をくれ、両親にすぐに病院に来るように言いました。私に骨髄腫が見つかったのです。これは骨の細胞の病気です。抗がん剤治療や放射線治療では完治しません。私は骨髄移植を受ける必要がありました。幸運なことに、私の妹の骨髄のタイプが一致しました。私はとても幸運でした。骨髄提供者を見つけるのは並大抵のことではないのです。その治療経過で、私より妹が傷つきました。私はおよそ4ヶ月間病院にいました。次の年は、私はフォローアップのために病院に入ったり出たりでした。私は薬や時には食べ物までも通すIVチューブを胸に付けていました。私は今でも、首や胸にIVチューブの恐怖を感じます。私は10歳になるまでに8年間、免疫抑制剤を飲んでいました。そして今も名前を挙げればきりがなほどの錠剤とドリンクを毎日飲んでます。私は少しでもよくなるようにそうし、3ヶ月ごとに病院に行きます。ですから、他の人はちょっと体を切ったり傷つけたりすることでとても傷つくと思ったとき、私にはなかなかそれを理解することができませんでした。

私はいつも疎外感と他者との違いを感じます。「友達」とは何か、私には理解できません。しかし私は友達には期待すべきではないと本当に思います。友達がいても楽にはなりません。私は本当に他の人とはとても違うのです。女の子はお互いのおさげ髪の話をしつづけます。鏡を見ていると私は、カツラでなくて、髪を後ろにくくってポニーテールにできたらどんなによいだろうと思います。素敵でしょうね。リトルマーメイド（人魚姫）のように長い髪は、泳ぐとダンスをするでしょう。そうだ。私はアリスになりたい。アリスのように大きくなったら本当にいいのに。体育の時間に他の生徒がいい加減なパスをしたら私は取ることができません。私の皮膚には傷があります。私の手はしわが寄っています。私は14歳だった頃、いつも10歳と間違えられていました。私についてこんな話は尽きません。でも本当に傷ついたことは、話をする友達がいないことではありません。誰も私に深刻な話をする人がいないことです。私は癌とのつき合いの中で、私の生活の中に真実が欠けていることについて、よく苦情を言います。

私は家に帰るときが一番好きです。私は自分が普通に見えるように着けていたものを外します。玄関を閉めるとかかとの高い靴を脱ぎ、チクチクするカツラを取って、さえない私の茶色の毛になり、楽な服に着替えます。そうするともっと私らしくなります。私はステージ上の演奏家のような気分になります。自分のコスチュームを着替えると、ステージ上の人格を着替えるのです。ステージの上では、私は自分の本当の感情を隠し、違う自分を輝かせなくてはなりません。それはそれで大切ですが、私は自分自身を馬鹿にしているような気がします。時々流れる涙は、どんな言い訳もできません。私が「振り」をするのをやめたら、ショーは終わりだと言うことを知っています。私の母は強く、明るい人で、いつも私のために居てくれました。でも、この母がいても仲間とつながっていることは必要で大切なことでした。時々、私は自分の感情に罪悪感を感じました。生活の中には多くの楽しいことがあります。私には母に罪悪感を感じるようなどんな権利があるのでしょうか。私はわがままでしょうか。私は生きていくだけで満足すべきでしょうか。これは多分、生存者の罪悪感でしょう。母は「それでいいのよ」と言います。私は母を信じていると思います。母への二つの感情のジャグリング。十代に普通に見られるこの種の感情はとても繊細で退行的です。多くのことはわからないけれど、ひとつのことだけはわかっています。それは時が解決してくれる、ということ。時間だけ、どんなときでも、1日は1日。一日は小さな瞬間の積み重ね。

つらい厳しい日はいつか過ぎることを人は知ってはいなくてはならないでしょう。多くの場合、それはすぐ去ってゆきます。だから今ある時間を浪費しないで。なぜなら、あなたはすばらしい場所に生きているんだから。笑顔で単純なことに喜び、複雑なことは挑戦への旅だと考える。日々の小さなストレスはエラーだとして笑い飛ばし、失敗を楽しんで、人生に展望を持ち続ける。愛を持ってすべてを乗り越える。愛は単にあなたがここにいることを示すだけではありません。そしてあなたが毎朝、目覚めたとき、あなたは息をしている。時には息も絶え絶えになることがあっても、あなたはまだ、息をしている。吸って、吐いて、吸って、吐いて…。一日は一瞬の積み重ね。吸って、吐いて、吸って。

「人生の法則」エッセイコンテスト入賞作品（2002）

【資料3】

勇気

学校で起こった小さな事件。私はある疑問をもった。そしてそのことで、私はいくらか、節度あるものの考え方ができるようになった。ディーナは私の知っている女の子。ちょっと変っていて、友達がいなかった。そしてそれを私たちは悪いと思ってはいなかった。私たちは彼女といるのが嫌だっただけ。

私たちはスーザンの家で大きなパーティを企画した。学校の生徒のほとんどが招待された。しかし、誰もディーナを招待しなかった。

高校でその秘密は長くは守れなかった。私たちはディーナが泣き始めたのを見たとき、何もなかったかのように振る舞った。あなたは私が冷たいと思うだろう。私は自分にとっての利を通しただけ。悲しいことだけど、それは学校生活にはよくあること。

私たちは、できるだけ寄り添わなくては好きな友達だけを選ぶことはできない。私はディーナと友達になれなかった。なぜなら、友達になったら、周りの人が私をディーナのように扱うだろうから。

高校のある授業で、人間が犯してきたことを学んだ。ガス室や爆弾テロ、銃、アウシャビッツや日本、マレーシア。学んだことを私には全部は理解できなかった。時に、ただ座って、そして泣いていた。世界とは、無罪なのに焼け落ちるのを見るために存在しているように思えた。

あるルールに従うロボットのように、破壊が暴力的な人によってなされる。暴力的な人はみな、自分の仕事をしているだけなんだ。そして、歴史上の暴力は何のために成されたのか？ それは節度ある行為なのだろうか？

世界は生き地獄。でも誰もこの悪い行為に対して恥ずかしさで涙を流さない。責められる人も誰もいない。話したくても怖くて話せない話も多くあるだろう。私にできることは、残虐さが再び世界を覆わないようにすることだ。世界中の女性と男性に気を配り、配慮する。私はディーナを招待することから始めることにする。

Bob Blue